

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

五 七 日

1. なんまんだぶ

七日参りの帰り際、ある少年から「なんまんだぶ、ってどんな意味なの？」と尋ねられました。同席した大人も、尋ねてみたい質問であったと思います。

私たちは、仏壇に向かってお参りが始まる時、合掌をして「なまんだ一ぶ。なまんだ一ぶ」と言います。お経が終わると、また「なまんだ一ぶ。なまんだ一ぶ」と言って合掌します。お勤めも「南無阿弥陀仏」と

いう言葉が繰り返されます。

少年の疑問は当然のことで、あんなにたくさん言っている言葉はどんな意味だろう、と思ったのでしょう。

2. 南無阿弥陀仏とは

南無阿弥陀仏は漢字六文字ですが、漢語ではありません。中国の人がこの漢字を読んで、直ぐに意味の分かる言葉ではありません。古代インドのサンスクリット語の音写な

のです。サンスクリット語は、古代インドで哲学や宗教を記すための言語としてパーニーニによって作られたと言われていています。だから、日常的な会話で使われることがほとんどなかった言語です。

「南無」というのは、サンスクリット語の「ナマス」の音写です。「帰命」とか「帰敬」「敬礼」などと意識されています。インドでの挨拶で、「ナマステ」と言うのは、この「ナマス」からきた言葉です。

「阿弥陀」というのは、やはりサンスクリット語の「アマタ」の音写です。サンスクリット語の「アマターバ」と「アマターユス」の共通部分の「アマタ」という言葉で、この二語を包括した言葉です。「アマターバ」と言うのは「無量光仏」と訳されます。「アマターユス」は「無量寿仏」と訳されます。つまり、「無量光仏」は空間的に無限の仏であり、「無量寿仏」は時間的に無限の仏であるので、それゆえ「阿弥陀」というのは無限の仏を意味します。

「仏」というのは、サンスクリット語「ブッダ」を「仏陀」と音訳して「陀」が落ちたものです。「仏陀」と「仏」は同義語として使われます。

3. 南無阿弥陀仏の意味

この説明で、南無阿弥陀仏の意味が分かったかということ、そんなことはないだろうと思います。この説明は言語的な説明で、意味の説明ではありません。では、どんな意味でしょうか。

その意味は、宗派によって異なります。日本の主な仏教宗派の内、南無阿弥陀仏という言葉を使うのは真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗だと思います。

真言宗では、「呪文の南無阿弥陀仏」だと思います。呪文というと叱られそうですが、真言なのです。真言とは、まことの言葉です。よく真言宗のお坊さんが、お勤めの中で聞き取れない言葉を唱えています。いくら耳を凝らしても聞き取れません。それは、サンスクリット語を唱えているからです。インドの尊い言葉をそのまま唱えることによって、その言葉に力があると考えたのです。その言葉こそが、真言なのです。音としての言葉だけでなく、文字もそのまま伝えようとしたのです。それが梵字です。

こうした行為は、非科学的に思え

るかもしれませんが、そんなことはありません。かつてサンスクリット語の解説は、18世紀イギリスで植民地研究の中で、解説されたと云われていました。しかし、日本では独自に真言の整理をする中で、サンスクリット語の単語をまとめるようになり、鎖国をしていた江戸時代には飲光(おんこう)というお坊さんがサンスクリット語の文法を解明し、解説に成功しました。『仏説阿弥陀経』のサンスクリット原典を発見したのも、飲光でした。

天台宗の南無阿弥陀仏は、「修行の南無阿弥陀仏」と言えるでしょう。天台宗には常行三昧という修行があります。比叡山延暦寺には常行三昧堂というお堂があります。上から見ると正方形のお堂で、中心に阿弥陀仏像が安置されています。このお堂を締め切って、90日間、阿弥陀様の周りを歩きながら「南無阿弥陀仏」と唱え続けるのです。不眠不休で唱え続けねばならないという、とてつもない修行です。つらいどころか、とても不可能に思える修行です。

私は学生時代、天台学の碩学である佐藤哲英先生に連れられて常行三昧堂に行きました。ちょうど酒井

雄哉師がこの修行を終えたところでした。酒井師は、私たちにお堂を開いて見せてくれました。柱から柱へ太い孟宗の青竹が手すりのように括りつけられていました。酒井師は南無阿弥陀仏と唱えながら歩いていて、どうしようもなく眠くなるとその青竹に寄りかかったそうです。眠るとその青竹から滑り落ちて床にたたきつけられて、目を覚ましたそうです。誰かが何のためにこの修行をするのかと尋ねました。酒井師は阿弥陀仏に会うためにするのです、と答えられました。つづけて、修行の3分の2を過ぎたあたりで阿弥陀仏に会えたとおっしゃいました。その偉容はこのお堂の倍程の背丈だったそうです。酒井師の体験を幻覚ではないかという人もいますが、私は酒井師の言葉が信じられました。後になって、私が出会った酒井師は数百年にひとり出るか出ないかの優れた行者であることを知りました。

次に浄土宗の南無阿弥陀仏は、「お願いの南無阿弥陀仏」だと言えます。少し正確にいうと、浄土宗の鎮西派の解釈で、西山派の解釈は「よろこびの南無阿弥陀仏」という

そうです。前回の『阿弥陀経』の話
しで、臨終に際して阿弥陀様が私を
迎えに来てくれると言いました。そ
して、極楽浄土に連れて帰ってくれ
るのです。だから「私が死ぬときに、
どうか迎えに来てください」と阿弥
陀仏にお願いをするのです。「修行
の南無阿弥陀仏」は、出家者にしか
できません。しかし、“お願いしま
す”という気持ちで南無阿弥陀仏と
言うのは、普通の暮らしをしている
人にもできます。誰にでもできます
が、お願いをした人のところにしか
迎えに来てもらえません。だから、
しっかりとお願いをした方がいい
という百万遍念仏という考えも出
てきます。京都の人は京都大学があ
るところを「百万遍」と呼びますが、
百万遍念仏で有名な浄土宗の知恩
寺があるところですよ。

浄土真宗の南無阿弥陀仏は、「あ
りがとうの南無阿弥陀仏」と言える
でしょう。浄土宗の説くように阿弥
陀仏が我々を救済してくれるとい
うところは変わらないのですが、阿
弥陀仏は我々人間をすくい取ると
決心したのです。その決心を本願と
いいます。私は、本願によって救わ
れるとすでに定まっているのです。

だから、阿弥陀仏が必ず救ってやる
と言っているのだから、ありがとう
と言えばいいのです。

4. 『竹取物語』

「ありがとう」という言葉は、日
本社会の中で大切にされてきた言
葉だと思います。それは、『竹取物
語』に表されていると思います。誰
がどのように作ったか分かりませ
んが、昔から『かぐや姫のお話』と
して受け継がれてきました。

このストーリーを語る必要はな
ないと思います。かぐや姫の月に帰
る場面は、とても悲しいです。かぐ
や姫が月に帰らねばならないと、お
爺さんとお婆さんに告白しますが、
老夫婦は受け入れることはできま
せん。月に帰るといのはかぐや姫
の死でありましょう。

老夫婦は最愛の娘の死を受け入
れることはできません。死がすべて
の人に訪れることは、誰もが知っ
ていることです。知っていることと受
け入れることは異なります。彼らは、
娘の死を阻止するためにあらゆる
手段を使います。竹取の翁おきなは帝みかどの
力を借りてでも、月からの迎えを阻
止しようとします。月に去ろうとす

るかぐや姫の衣ころもの裾すそにすがる老夫婦の姿に涙が流れます。命のはかなさ、命が消えていくことの悲しさを語っています。

一方で、竹藪で竹取の翁がかぐや姫を見つけて、翁と媼おうなが育てる場面は明るく華やいだものです。命の出会いです。人類の何万年にもわたる限りない命のいとなみがあり、またこの地球上で何十億という命のいとなみがあります。その中で、私たちはほんのわずかな命にしか出会えません。私の意思で出会えた命ではありません。それだけに尊くありがたいことです。私たちは、自分の命を含めて、はかなくて尊い命に

出会っているのです。そのことに“ありがとう”と言ってきた物語が『竹取物語』だと思います。

5. 阿弥陀仏の力

私たちが出会った命は、消えてゆきます。送る命と送られる命があります。その命が、また再び出会うのが、極楽浄土です。そんなことはどうでもいいと言う人もいるでしょうが、私はまた会いたいと思います。会えるものならどうしても会いたいものです。それが阿弥陀仏の力によるものであるなら、「ありがとう」の一語しかないと思います。